

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 GRUPO ARACÉ(グループ・アラッセ)

1 事業の趣旨・目的

ブラジル人(当事者)で教育に携わる人を対象に、日本で暮らすブラジル人の子どもの教育課題に特化し、就学前から進路の保障までを視野に入れた日本語・学習支援のあり方を考える。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者 (敬称略)	議題	会議の概要
2009年7月 8日 15:30-17:30	浜松国際 交流協会 セミナー ルーム	石井由貢 近田由紀子 堀永乃 松本一子 山口祐子 山野上麻衣 吉田佐織 米勢治子	・委員顔合わせ ・講座の企画案について ・広報の方法について	委員の顔合わせを行った後、講座の目指す方向性を確認し、講座全体の組み立てや広報の方法について協議した。
2009年10 月7日 15:30-17:30	アラッセ 教室	秋元ルシナ 石井由貢 堀永乃 松本一子 山口祐子 山野上麻衣 吉田佐織 米勢治子	・講座の中間報告と今後の 進め方について	全7回の講座のうち、第3回までが終わった折り返し地点での開催。開講状況、参加者の属性を報告した上で、今後の課題や対処法について協議した。
2010年3月 15日 15:00-17:30	アラッセ 教室	秋元ルシナ 石井由貢 近田由紀子 堀永乃	・講座の報告および今後の 課題について	講座の総括を行い、講座を通じて見えてきた課題や、今後の取り組みの方向性について協

		松本一子 山口祐子 山野上麻衣 米勢治子		議した。
--	--	-------------------------------	--	------

3 養成講座の内容について

(1) 養成講座名

ARACÊ ポルトガル語話者のための子ども支援実践者講座
～日本で育つブラジル人の子どもの学びに寄り添うために～

(2) 養成講座の目標

ブラジル人の子どもたちが就学前から進路の選択に至るまでの各段階で直面する言語発達・学習の課題について学ぶことにより、ブラジル人コミュニティが当事者として子どもを取り巻く教育課題に向き合い解決していける力をつけることを目指す。また、講座を進めるプロセスの中で、キーパーソンのネットワーク化を図る。

(3) 受講者の総数 19 人

(4) 開催時間数(回数) 21 時間 (7 回)

(5) 参加対象者の要件

- ・日本で暮らすブラジル人の子どもの教育にかかわっていること
- ・ポルトガル語での議論に参加できること

(6) 受講者の募集方法

- ・「ブラジルふれあい会」(ブラジル人コミュニティ組織)のウェブに掲載
- ・浜松国際交流協会にチラシを設置
- ・市教育委員会によるサポーター(学校巡回通訳)研修で配布
- ・ブラジル人学校に個別に連絡(教員への周知)
- * チラシ添付(設置・配布したのはポルトガル語版)

(7) 研修会場

浜松市中区佐鳴台、アラッセ教室

(8) 使用した教材・リソース

教材は基本的に講師が作成したレジュメ及びその翻訳版(ポルトガル語)。

既存のリソースで配布・使用したものは以下の通り(講師より提供のあったものを含む):

- ・『静岡県公立高校進学ガイドブック(ポルトガル語版)』(浜松NPOネットワークセンター作成)

- ・『神奈川県「公立高校入学のためのガイドブック」(ポルトガル語版)』(多文化共生教育ネットワークかながわ作成)
- ・『愛知県 プレスクール実施マニュアル』(愛知県作成)
- ・『日本で暮らすブラジル人の子どもたちへ』(愛知教育大学作成)

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
9月12日(土)	オリエンテーション	(ファシリテーター) GRUPO ARACÉ 山野上 麻衣	13人
9月26日(土)	小学校の現状と取り組み	浜松市立瑞穂小学校、外国人児童指導担当教員 近田由紀子 浜松市立瑞穂小学校、外国人支援サポーター、齊藤ナイル美紀子	15人
10月3日(土)	中学校の現状と取り組み	浜松市立江南中学校、外国人生徒指導担当教員、水島洋子	15人
	学校外での実践(1) バイリンガル教育の観点から	AJAPE(日本ペルー共生協会)副代表、高橋悦子	
10月17日(土)	学校外での実践(2) いろいろな地域のいろいろな形の支援	にほんごNPO代表、加藤庸子 IAPE、富本潤子 川崎市ふれあい館、児童指導員、仲松ヒカルド光男	19人
11月7日(土)	就学前の子どもの環境と言語発達	豊橋市教育委員会外国人児童生徒相談員、築樋博子	18人
11月21日(土)	高校進学と高校生への支援	多文化共生教育ネットワークかながわ・神奈川県立新磯高等学校教諭、高橋清樹 静岡県立浜松北高等学校定時制課程教頭、杉浦義明	16人
12月5日(土)	当事者として子どもの教育を考える	多文化共生教育ネットワークかながわ、宮ヶ迫ナンシー理沙	50人

		神奈川県立高等学校教諭、松井アレサンドロ Y M C Aいずみ保育園保育士、松井リリアン 浜松学院大学学生、中村リリアン	
--	--	--	--

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

質問紙によるアンケートはとっていないが、毎週議論を行う時間をとることによりその回の感想を聞くとともに、最終回に修了証を授与する際には一人ずつ感想を述べてもらった。

感想の中で主なものは以下の通り:

- ・日本の学校がどのようなところで、外国人に対してどのようなサポートがあるのか、これまでまったく知らなかったがよくわかった(ブラジル人学校関係者より)
- ・ブラジル人学校がどのようなところかよくわからなかったし、偏見をもっていた部分もあったが、ブラジル人学校の先生たちもそれぞれの思いでがんばっており、同じ子どもたちを育てていくための仲間だということがわかった。(日本の公立校の関係者より)
- ・他の地域で行われている学習支援・相談活動・子どものエンパワメントなど、さまざまな取り組みを知ることにより、浜松で自分たちでも同じような取り組みをしてみたいと思うようになった。
- ・高校進学の際の外国人枠設置など、隣の県(神奈川県)との差が大きいことを知った。ブラジル人が高校進学をめざすのは日本で暮らす決意を固めているからであり、外国人だからといって差別するのではなく、夢をもって成長するのを応援してほしい。そのための声をあげていきたい。
- ・公立学校の先生や日本人のボランティアがこんなに一生懸命外国人の子どもをサポートしようとしていることを初めて知った。ブラジル人としても、もっと自分たちの問題として考えていきたい。

② 実施主体からの研修内容結果評価

- ・ブラジル人の当事者が自ら問題を知り、問いを立て、行動しようとする基盤をつくれたことは非常に重要だった。
- ・ブラジル人学校の先生方を、一緒に問題を解決していくパートナーと認識できるようになったのは大きなメリットだった。貴重なネットワークができた。
- ・当事者による活動をしていく上でのインセンティブになった。

・偶然とは言え時期的に文科省委託による「虹の架け橋事業」を行うための基盤作りともなった。

・浜松のブラジル人が、他地域で活動している人との交流をもてたことがよかった。

・最終回の若者の声を聞く回では、受講生に加え、当事者の若者たちが出会い語り合う場をつくることができた。神奈川で3回教員採用試験を受けて高校教員になったブラジル人の若者の話を聞くことで、浜松で教員採用試験に今年失敗したブラジル人の学生が大いに励まされ、これからもがんばりたいし、自分ももっと語りたいという意欲を持つようになった。また、この日の講座を見に来た中学校3年生のブラジル人生徒は、自分もがんばって高校に行くという意欲を持ち勉強に励むようになり、志望校に合格することができた。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

・土曜日に行ってきたボランティア教室は午前中のみで、小学生の受け入れが多かったが、午後も開講し中学生専用のクラスを作り、高校進学を目指す子どもたちを応援する。

・文科省委託「定住外国人の子どもの就学支援事業」を受け、月～金は不就学の子どもたちを中心に就学支援を行う。

・NPO法人化を計画し、団体としての自立を目指す。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

同じ地域(浜松市)で行われている文化庁委託事業との連携はできていない。互いの忙しさやキャパシティの問題も理由としてはあるものの、根本的にはフォーカスの違い、あるいは目指すところ(当事者の自立を目指すか否か)が違うことからくる連携の難しさがあると考えられる。しかし一方で、同じ志をもち他地域で文化庁委託事業を行っている団体(ABCジャパン、日本ペルー共生協会)とはこの事業を通じてネットワークが確立され、今後も相互に助け合い高め合っていくことができると期待される。

② 研修後の人材活用

ほぼすべての受講生がすでに現場を持っている人だったため、この講座で学んだことを現場に持ち帰って広めてくれた形になった。アラッセのメンバーに関しては、これまでは他の仕事をやりながら土曜日のみボランティアで関わっている人が多かったが、たまたまこの時期に文科省委託事業で不就学の子どもたち向けの教室を開講することができ、月～金を含めて専従で働くことができるスタッフも出てきた。偶然とはいえ、本講座が文科省委託事業の立ち上げ期と重なったため、ブラジル人の子どもの教育を考える際に不可欠の知識を共に学んだり、事業の遂行に必要なネット

ワークを築いたりする絶好の機会となった。

(12) 今後の課題

・ネットワークの維持・深化

この講座を通じ、これまで会う機会のなかった人と人との信頼関係を築くことができたのは大きな収穫であった。しかし、ネットワークや信頼関係を維持するためには定期的な手入れが必要である。自主的な研修や、イベントなどでもよいが、講座の修了生が集まり近況を報告したり相談しあったりするような場づくりを積極的に行う必要がある。

また、個人レベルだけではなく機関レベルでも、運営委員就任依頼や講師派遣依頼を通じ、浜松で外国人を多く受け入れている公立小中高とアラッセの間で顔の見える関係ができた。同時に、講座の開講や運営委員・講師派遣依頼に先立って、市教委とのコンタクトもこまめに行った結果、若い団体であるアラッセの存在が教育委員会の中でも一定程度認知されることになった。しかし一方で、市内の大多数の公立校や市教委との関係性はまだまだ弱く、深めていくことは今後の大きな課題である。

ブラジル人学校との関係性も、意識の高い教員レベルではつながりができたと言えるが、学校運営全体の中での教員の位置づけは必ずしも強くなく、学校自体と風通しのいい関係ができたわけではない。ブラジル人学校の場合、他のブラジル人学校や公立学校が経営上の「ライバル」であるという固有の難しさがあり、そこを乗り越えて子どもたちのために連携・協働していくためには工夫が必要である。

・当事者による活動のための資金の確保

当事者による活動は、日本人の経済的にゆとりのある人たちによるボランティア活動とは違い、ある程度の生活の保障を伴わない限り発展しない。しかし、それなりの賃金を出すことへの社会的な合意を得るためには、正当性をもたせる必要がある。正当性をもたせるためには、賃金に見合う専門性が必要とされるが、専門性を育てるためには一定程度の安定した雇用環境、ある程度の長期的なビジョンに基づく人材育成が必要であり、そのために先立つものとして資金が必要となる。しかしそのような資金もないため、人材も育たない、賃金をつけて雇用するための正当性も得られないという悪循環から抜けださずにいるのが現状である。現在、空から降ってきたように文科省委託事業で3年間の時限付きであるものの年間2000万円の予算がつく中で、アラッセとして「人を育てる」ことも強く意識している。ボランティア活動の価値もそれとして認めるものの、ボランティアに依存した不安定な基盤では、本当に不安定な位置にある子どもたちやその保護者を支えることが極めて難しい。継続的に資金を確保しつつ、安定した基盤をどのように築いていくのが団体として最大の課題である。